

水泳授業における泳力と授業評価の関連性

—— 教員養成課程の模擬授業をもとに ——

田 井 健太郎・元 嶋 菜美香・神 野 周太郎
宮 良 俊 行・宮 本 彩・正 見 こずえ
野 尻 奈央子・高 橋 浩 二

The Relationship Between Swimming Ability and Student's Formative Assessment in Swimming Class

—— Based on the Trial Teaching Class in a Teacher Training Course ——

Kentaro TAI, Namika MOTOSHIMA, Shutaro JINNO
Toshiyuki MIYARA, Aya MIYAMOTO, Kozue MASAMI
Naoko NOJIRI and Koji TAKAHASHI

水泳授業における泳力と授業評価の関連性

—— 教員養成課程の模擬授業をもとに ——

田 井 健太郎¹⁾・元 嶋 菜美香²⁾・神 野 周太郎²⁾
宮 良 俊 行²⁾・宮 本 彩³⁾・正 見 こずえ⁴⁾
野 尻 奈央子⁵⁾・高 橋 浩 二⁶⁾

1) 群馬大学共同教育学部保健体育講座

2) 長崎国際大学

3) 環太平洋大学

4) 大阪産業大学

5) 福井工業大学

6) 長崎大学

(2020年9月30日受理)

The Relationship Between Swimming Ability and Student's Formative Assessment in Swimming Class

—— Based on the Trial Teaching Class in a Teacher Training Course ——

Kentaro TAI¹⁾, Namika MOTOSHIMA²⁾, Shutaro JINNO²⁾
Toshiyuki MIYARA²⁾, Aya MIYAMOTO³⁾, Kozue MASAMI⁴⁾
Naoko NOJIRI⁵⁾ and Koji TAKAHASHI⁶⁾

1) Department of Health and Physical Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

2) Nagasaki International University

3) International Pacific University

4) Osaka Sangyo University

5) Fukui University of Technology

6) Nagasaki University

(Accepted on September 30th, 2020)

キーワード：学校体育，模擬授業，形成的授業評価，教員養成課程

Keywords : School physical education, Trial teaching class, Student's formative assessment, Teacher's training course

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between the swimming ability of the student role and the Student's formative assessment. The target participants for students in the trial teaching class were 22 students. Each of the 4 classes was assigned to 4 different students who belong to the physical education teacher

training course. The swimming ability of the students was calculated based on the 25m freestyle and 200m individual medley times based on the qualification standard records of the Japan Masters Swimming Association. At the end of each class, those who had taken the trial class evaluated them using the Student's Formative Assessment Scale modified from previous research (Takahashi et.al [1994]).

The main findings of the study were as follows: comparing the Student's Formative Assessment Scale (SFA) of high and low groups (HG and LG) were categorized by swimming ability values for all classes, HG showed significantly higher values than LG in 'Skill growth' ($p < .05$). In the correlation between the SFA and the comprehensive evaluation in all classes, the comprehensive evaluation was strongly related to all SFA lower factors ('Impressive experience' ($r = 0.61, p < .01$), 'Skill growth' ($r = 0.57, p < .01$), 'New discovery' ($r = 0.63, p < .01$), 'Best exercise' ($r = 0.35, p < .01$), 'Fun experience' ($r = 0.58, p < .01$), 'Voluntary learning' ($r = 0.47, p < .01$), 'Learning with good faith' ($r = 0.41, p < .01$), 'Learning friendly' ($r = 0.49, p < .01$), 'Collaborative learning' ($r = 0.45, p < .01$). In the correlation between the SFA in all classes and the swimming ability, the swimming ability was strongly related to 'voluntary learning' ($r = -0.30, p < .05$) and 'learning friendly' ($r = -0.31, p < .01$).

In swimming classes in physical education, there may be differences in learning and satisfaction in the class depending on the swimming ability, so it is necessary to consider students with different swimming abilities in designing and conducting lessons.

1 緒 言

小学校では2020年4月より、2017年に告示された新しい『学習指導要領』が完全実施となった。新『学習指導要領』においては、これまでと同様に小学校から高等学校まで水泳系領域が体育・保健体育授業で取り扱われ、小学校、中学校では必修として授業が行われる（文部科学省 [2018a], 文部科学省 [2018b], 文部科学省 [2019]）。特に、小学校体育の水泳領域での変更点としては、①中学年・高学年の領域名が「浮く・泳ぐ運動」「水泳」から「水泳運動」に変更されたこと、②高学年の内容に、「安全確保につながる運動」が加えられたこと、③背泳ぎを「加えて」指導できることが明文化されたことがあげられる。また、中学校体育の水泳領域においても、「安全を確保するための泳ぎを加えて履修させることができること」が新たに示され、泳法の習得とともに、生存のための泳力への視点にも力点が置かれたことが伺われる。

これまでに学校体育における水泳授業についての研究は、小学校から大学までの多様な対象者に対し、様々な角度からの検証成果が報告されている（上原 [1985], 上田 [1991], 黒川 [1991], 岩田 [1997],

大山 [2002], 三輪 [2010], 山下 [2010], 金沢ら [2014], 寺本ら [2017], 本間 [2017], 竹内ら [2017], 佐藤 [2017], 川上ら [2018]）。また、大学における教員養成課程での水泳実技授業についての研究も複数報告されている（永木 [1998], 天野ら [2015], 宮本 [2018], 西田 [2018], 山田 [2018], 田井 [2019]）。これまで、大学の教員養成課程においては継続して教育実践の質を向上される研究が行われ、学生達が指導法の立案、実施及び反省を行い、教員・指導者として必要となる資質・能力の育成が図られてきた（福ヶ迫 [2007], 徳永 [2009], 木原 [2010], 青木 [2013], 宮尾 [2014], 松本 [2015], 木山 [2016], 田井 [2018a], 田井 [2018b]）。指導内容、指導方法の一層の改善が求められる昨今、教員の資質向上に向けて、養成段階である大学教職課程での教員養成の質向上が期待されている（文部科学省 [2016], 中央教育審議会 [2015]）。

しかしながら、多様な技能の児童生徒が含まれる水泳授業を対象とした児童・生徒の技能と学びの成果の関連に関する報告は少なく、詳細について明確ではない。そこで、本研究では、水泳授業対象者の泳力が授業評価とどのような関連をもつかについて明らかにするために、大学での模擬授業をもとに、

生徒役学生の泳力と生徒役学生の模擬授業に対する形成的授業評価の関連について検討する。

2 方 法

2.1 対 象

対象とする授業は、教員養成課程学生による模擬授業とした。生徒役学生は、大学生 22 名（3 年生：6 名、2 年生：11 名、1 年生：5 名）であった。4 授業のそれぞれの授業担当教師役学生は、保健体育教員養成課程に所属する大学 2 年生 2 名、3 年生 2 名であった（表 1）。それぞれの授業は各 1 名が異なる指導案を作成し、実施を行った。

表 1 分析対象

教 材	水泳①	水泳②	水泳③	水泳④
授業担当者 学年	2 年	2 年	3 年	3 年
専門競技	水泳 (競泳)	トライアスロン	陸上競技 (投擲)	陸上競技 (短距離走)
生徒役 参加人数	16	18	20	20

2.2 授業の内容

対象とした模擬授業は、2019 年 8 月に屋内プールにおいて二日間にわたり実施した（表 2）。各模擬授業は、中学生を対象とした保健体育科目の水泳領域の授業を想定したものであり、生徒役となった大学生には対象学年や模擬授業実施のねらいについて説明した上で授業を行った。

表 2 授業の内容

教材	水泳① (n=16)	水泳② (n=18)	水泳③ (n=20)	水泳④ (n=20)
対象	中学校 3 年	中学校 2 年	中学校 2 年	中学校 2 年
本時の ねらい	水中動作の理解と 習得	バタフライキックの 習得	平泳ぎの習得	バタ足の習得
展開の概要 (技能面)	・ストリームライ ンの理解 ・蹴伸び、板キッ ク、スイム	・ビート板を用いて のキック ・ビート板なしの キック ・リレーなど	・ビート板を用いて のキック ・ビート板なしの キック ・スイム	・壁を用いたバタ足 練習 ・ビート板を用いて のキック ・リレーなど
展開の概要 (学習活動)	・バディ活動 ・4 人組チームでの リレー	・バディ活動 ・4 人組でのコース 分け	・4 人組チームでの 活動 ・バディ活動（相互 のフィードバック） ・4 人組チームでの リレー	・バディ活動（相互 のフィードバック）

2.3 泳力および授業の評価

生徒役の泳力については、事前および事後に測定した 25m 自由形および 200m 個人メドレーのタイムを、（社）日本スイミングクラブ協会マスターズ年齢別資格表の泳力評価基準を用いた資格級をもとに数値化し算出した。各種目最高点数 20 点から 0 点に得点化し、二種目（25mFr, 200mIM）で最高 40 点から 0 点までの泳力数値に分類した。0 点から 10 点までの生徒役学生を泳力下位群（ $n=10$ ）、11 点から 36 点までの生徒役学生を泳力上位群（ $n=12$ ）とした。

模擬授業を受けた全学生に対してそれぞれの授業終了後に、形成的授業評価表を用いて当該模擬授業の評価を採取した。調査表は、高田、小林、高橋らによって作成改良された形成的授業評価を用いた（高田 [1979]，小林 [1978]，高橋 [1991]，高橋 [1994b]）（表 3）。

表 3 生徒役に用いた形成的授業評価

内 容		はい←どちらでもない→いいえ
1	・深く心に残ることや、感動することがありましたか。	5・4・3・2・1
2	・今までできなかったこと（運動や作戦）ができるように。	5・4・3・2・1
3	・「あつ、分かった!」とか「ああ、そうか!」と思ったことがありましたか。	5・4・3・2・1
4	・精一杯全力を尽くして運動することができましたか。	5・4・3・2・1
5	・今日の保健体育の授業は楽しかったですか。	5・4・3・2・1
6	・自分から進んで、学習することができましたか。	5・4・3・2・1
7	・自分のめあてをもって、学習することができましたか。	5・4・3・2・1
8	・友達と協力して、仲良く学習できましたか。	5・4・3・2・1
9	・友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか。	5・4・3・2・1
総合評価		5・4・3・2・1

形成的授業評価は、9 項目からなる尺度であり、因子には「体育目標」、「学び方」の 2 つが示されている（高橋 [1991]，高橋 [1994a]）。本評価は、体育授業の目標や内容に対して、生徒がそれらの内容をどれだけ習得できたかを適切に評価するために作成されたもので、これまで多くの授業研究で用いられた尺度である。回答は、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」までの 5 件法で行った。データ処理には、「はい」に 5 点、「はい」と「どちらでもない」の間に 4 点、「どちらでもない」に 3 点、「どちらでもない」と「いいえ」の間に 2 点、「いいえ」に 1 点を

与えた。これまで、3件法は小学校中学年まで、4件法は小学校高学年以上に対して誤った回答を避けるために用いられていたが、本研究においては、対象が大学生であることから、より詳細な評価を得るために5件法を採用した（田井 [2018a]）。

2.4 統計処理

泳力数値を基に対象者を上位群、下位群に分け、それぞれの群の形成的授業評価について、また、泳力と形成的授業評価各項目との相関について検討した。統計処理は、SPSS ver.25 を使用し、有意差検定として t 検定、相関検定として Pearson の相関係数を算出した。有意水準は危険率 5% 未満とした。

2.5 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査の実施前に口頭で研究の実施内容を説明したうえで、参加者に本調査への参加を依頼し、全員から承諾の確認を行った。なお、事後にいつでも同意撤回することができること、調査結果を個人が特定されないよう加工した上で使用することを説明した。

3 結果と考察

3.1 泳力と形成的授業評価の関係

全 4 模擬授業の生徒役学生（のべ人数 $n=74$ ）の形成的授業評価を泳力上位群（のべ人数 $n=41$ ）、泳力下位群（のべ人数 $n=33$ ）で比較したところ、「技能の伸び」（ $p<.05$ ）において泳力上位群が泳力下位群に対し有意に高い値を示した（表 4）。

先行研究を概観すると、体育・保健体育授業における技能下位群を対象とした検討が多く行われている。例えば、運動嫌いの児童は運動能力に関して多くが例外なく劣等感を持っていること（波多野ら [1981]）、運動技能レベルの低い児童は学習行動が消極的になり、授業評価も低くなる傾向にあることなどが報告されている（高橋 [1999]）。また、水泳領域以外の教材の授業においては、技能上位群と下位群の授業評価の比較研究では、技能水準下位児は、技能水準上位児に比べて、矯正的フィードバックを受け入れる傾向にあることや（Rikard [1991]）、身体的有能感の高い生徒は低い生徒に比べて授業評価、態度評価がともに高いことが報告されている（北ら [1995]）。本研究の結果をみると、泳力下位群にとっては、「泳げるようになること」や「泳ぎ切ること」

表 4 生徒役学生の泳力と形成的授業評価

下位項目	因子	全体 ($n=74$)		泳力上位群 ($n=41$)		泳力下位群 ($n=33$)		t 値	p
		M	SD	M	SD	M	SD		
1 感動の体験	成果	3.91	(0.71)	4.00	(0.71)	3.79	(0.70)	-1.29	n.s.
2 技能の伸び	成果	3.91	(0.85)	4.10	(0.77)	3.67	(0.89)	-2.20	*
3 新しい発見	成果	4.07	(0.90)	4.20	(0.84)	3.91	(0.95)	-1.36	n.s.
4 精一杯の運動	意欲・関心	4.55	(0.62)	4.61	(0.67)	4.48	(0.57)	-0.87	n.s.
5 楽しさの体験	意欲・関心	4.42	(0.72)	4.55	(0.64)	4.27	(0.80)	-1.61	n.s.
6 自主的学習	学び方	4.21	(0.67)	4.17	(0.74)	4.25	(0.57)	0.52	n.s.
7 めあてをもった学習	学び方	4.09	(0.71)	4.02	(0.65)	4.18	(0.77)	0.94	n.s.
8 なかよく学習	協力	4.35	(0.77)	4.27	(0.78)	4.45	(0.75)	1.04	n.s.
9 協力的学習	協力	4.39	(0.82)	4.34	(0.82)	4.45	(0.83)	0.58	n.s.
総合満足		4.05	(0.64)	4.09	(0.61)	4.00	(0.68)	-0.53	n.s.
泳力		13.00	(10.6)	20.02	(8.72)	4.06	(3.65)		

* : $p<.05$

などに学習の注意が向いているため、学びの視野が限定されていた可能性がある。つまり一つ一つの「できた」ではなく、「泳ぎ」の総体的結果を意識するため、一授業内ではそれが達成されず、「技能の伸び」および「新しい発見」の項目値が、上位群と比較して低く算出された可能性がある。一方で、泳力上位群においては、技能に一定の自信があることから、泳力下位群より各泳法における細かな技術を省察することができるため、細かな技術を研摩させ、それによる自覚的な学びと技能の成熟が生じた可能性が考えられる。一つ一つの「できた」を実感できた結果、「技能の伸び」の項目において高い値が算出されではないだろうか。泳力上位群と泳力下位群の間に生じた「技能の伸び」に関する差が意味するのは、児童・生徒が授業開始時に有する技能によって、学習内容を段階的に達成し学びへと昇華することに違いがあることである。クラス単位での単元計画、授業案や授業内での技能別指導などによって、一人一人の学習効果が期待できるよう努めることが必要である。

また、中学生を対象とした器械運動の授業研究では、単元後の運動スキルテストの結果、技能上位群、中位群、下位群すべての生徒たちの得点が向上し、なかでも下位群の伸びが大きかったことが報告されている（深見 [2015]）。下位群の生徒は上位群と比

較して、教師および友達からの役に立つ声かけを受けたと感じる回数が少なかった。授業中、教師は積極的に助言や賞賛を与える必要があり、授業中の先生の役に立つ助言が友達との協力的学習につながったり、教師の助言内容が友達同士の教え合いの内容に反映されたりする可能性が示唆されている。本研究における授業内容では、バディ同士での教え合いやリレーを用いたチーム活動によって、協力や仲間との共感を生徒が体感しやすいものであったと考えられる。そのため、本研究が対象とした模擬授業では、泳力下位群では、「楽しさの体験」や「なかよく学習」といった仲間と学習することへの評価が高まったのではないかと考えられる。

3.2 形式的授業評価下位項目と総合満足および泳力との相関

全4模擬授業の生徒役学生の形式的授業評価の下位項目と総合満足度との相関をみたところ、「感動の体験」($r=0.61, p<.01$)、「技能の伸び」($r=0.57, p<.01$)、「新しい発見」($r=0.63, p<.01$)、「精一杯の運動」($r=0.35, p<.01$)、「楽しさの体験」($r=0.58, p<.01$)、「自主的学習」($r=0.47, p<.01$)、「めあてをもった学習」($r=0.41, p<.01$)、「なかよく学習」($r=0.49, p<.01$)、「協力的学習」($r=0.45, p<.01$)の全ての下位項目において有意な正の相関

表5 形式的授業評価と総合満足・泳力との相関

下位項目	因子	総合満足 (r)	泳力 (r)
1 感動の体験	成果	0.611**	-0.16
2 技能の伸び	成果	0.568**	-0.03
3 新しい発見	成果	0.630**	0.03
4 精一杯の運動	意欲・関心	0.354**	0.07
5 楽しさの体験	意欲・関心	0.578**	0.11
6 自主的学習	学び方	0.466**	-.298*
7 めあてをもった学習	学び方	0.410**	-0.22
8 なかよく学習	協力	0.488**	-.309**
9 協力的学習	協力	0.451**	-0.13
総合満足		1	-0.15

** : $p<.01$ * : $p<.05$

が認められた (表 5)。

また、全授業の生徒役の形成的授業評価と生徒役の泳力の相関をみたところ、「自主的学習」($r=-0.30, p<.05$)、「なかよく学習」($r=-0.31, p<.01$)において有意な負の相関が認められた (表 5)。

本研究における模擬授業では、総合満足度と 9 つの下位項目とは全て強い相関が見られた。特に、「感動の体験」、「新しい発見」では相関度合いが高かった。生徒役となった大学生は、教職学生としての目線で授業を受講し、授業内容を通して、水泳授業の新しい体験や発見を成果として捉えていたことが考えられる。

体育授業における技能と形成的授業評価の先行研究では、大学生を対象にした器械運動の授業においてシンクロマットに取り組んだ実践研究事例で、演技創作を行う前後における形成的授業評価で成果、意欲・関心、学び方で実施後に高値を示したことが報告されている (鈴木 [2017])。本研究における授業内容では、パディ同士での教え合いによる協力やリレーを用いたチームでの協力、共感といったことを生徒役学生が体感できる手立てが講じられていた。従って本研究では泳力下位群の方が、仲間と学習すること・できたことへの評価が高まった可能性がある。また、本研究では、「自主的学習」において泳力との相関がみられたが、先行研究同様に泳力上位群は自身のための自主的学習より、泳力下位群へのアドバイスを優先して授業に取り組んだ可能性がある。その結果、「なかよく学習」の項目において泳力下位群がより、仲間との学習を感じたのではないだろうか。ただし、技能上位群が仲間へのアドバイスを優先することが「協力」因子の評価を下げることになることについては継続して検討する必要がある。

学習者の目線からみると、技能的難易度の低い学習内容においてこそ、児童・生徒によって技能 (泳力) と学び方に大きな差が生じる可能性があり、教師の働きかけに工夫が必要であることがうかがえる。しかしながら、現状の学校体育における水泳授業では、安全面の確保のために一斉指導の学習形態がとられることが多く、個別の能力に応じた指導をとることが難しいのが現状であるといえる (三輪

[2010])。また、教師の技能と指導能力に関しては、クロールにおいては泳力の低い教師役が泳力のある者に対して指導に困難感を強く持つが、平泳ぎにおいては泳力に関わらず困難感をもつことがあるなど、教材によって、泳力と指導の関係が異なることも予想される (野村 [2014])。

指導する内容の難易度、学習者の技能 (泳力)、教師の技能 (泳力) などの要因によって、学習内容、学習方法を柔軟に変化させることで、より学習者が主体的に学べ、学習効果の高まる授業づくりができるのであろう。

4 結 語

本研究では、水泳授業対象者の泳力が授業評価とどのような関連をもつかについて明らかにするために、大学での模擬授業をもとに、生徒役学生の泳力と生徒役学生の模擬授業に対する形成的授業評価の関連について検討した。全授業の生徒役学生の形成的授業評価を泳力上位群、泳力下位群で比較したところ、「技能の伸び」($p<.05$)において泳力上位群が泳力下位群に対し有意に高い値を示した。全授業の生徒役学生の形成的授業評価の下位項目と総合満足との相関をみたところ、全ての下位項目において有意な正の相関が認められた (「感動の体験」($r=0.61, p<.01$)、「技能の伸び」($r=0.57, p<.01$)、「新しい発見」($r=0.63, p<.01$)、「精一杯の運動」($r=0.35, p<.01$)、「楽しさの体験」($r=0.58, p<.01$)、「自主的学習」($r=0.47, p<.01$)、「めあてをもった学習」($r=0.41, p<.01$)、「なかよく学習」($r=0.49, p<.01$)、「協力的学習」($r=0.45, p<.01$))。全授業の生徒役の形成的授業評価と泳力の相関をみたところ、「自主的学習」($r=-0.30, p<.05$)、「仲良く学習」($r=-0.31, p<.01$)において負の相関が認められた。水泳授業においては、泳力によって授業の評価する項目に違いがあることが示唆された。

先行研究において技能下位群に焦点を当てた研究は散見されるが、技能上位群を対象とした研究は少なく、よって、技能下位群のみならず技能上位群も含めて検討の対象としていく必要があることが指摘

されている（浅川ら [2016]）。その指摘は、本研究のような技能上位群と技能下位群の形成的授業評価の比較検討を通して児童生徒の実態を明らかにしようとする試みが、よりよい体育授業の創造に向けて重要であることを示唆している。また、技能上位群と技能下位群の中層に位置づく技能中位群を設定し授業中の発語内容を分析することで、技能中位群が技能上位群と下位群の会話をつなぐジョイント役を担っている実態があることが報告されており、技能中位群の児童、生徒が授業で積極的に学びに参加する場面をつくることで、授業全体の学習効果が改善する可能性がある（山口 [2013]）。水泳授業において難易度の高い課題に挑戦しそれを達成することで、児童が成果を感じることがすでに指摘されていることから、中学生を対象とした授業において、授業マネジメントと指導効果の両面から生徒達の技能習熟度を適宜に見分けて授業課題を設定することが重要である（金沢ら [2014]）。

また一方で、水泳を指導する教師に目を向けると、近年教員採用試験では、実技試験を廃止する自治体が多く、教師の指導力への懸念が述べられている（植屋 [2006]）。水泳領域における学びの活動環境は、日常生活環境とは大きく異なることから、教師の技能が指導に影響を大きく及ぼすことが予想され、教員養成過程において一定の能力を教職課程の学生に身につけるカリキュラムが大切である（永木 [1998]、野村 [2014]、花井、[2016]、花井 [2017]、田井 [2019]）。

昭和 43 年の学習指導要領改訂以降、教材としての水泳は、体育・保健体育科目の中で、重要な位置づけがなされてきた（土居 [2009]）。社会の要請に応じて、授業の中で児童生徒が身に付ける能力や授業を通しての学びも変化している。子ども達が、身に付けるべき能力や求められる学びの観点から水泳授業を見直す必要があるだろう。

追記：本稿は、The 25nd Annual Congress of the European College of Sport Science の発表原稿を加筆修正し作成した。

参考文献

1. 青木幸子（2013）「模擬授業による教育実践力の育成の可能性」『東京家政大学博物館紀要』第 18 集，27-37 頁。
2. 浅川孝太，松本健太，岡田雄樹，針谷美智子，近藤智靖（2016）「小学校体育授業における運動技能水準上位児・下位児に関する事例的研究 —学習課題・教師・仲間との関わりに着目して—」『日本体育大学スポーツ科学研究』Vol.5，1-11 頁。
3. 天野秀哉，大山康彦，永山 透（2015）「水泳の授業認識と指導プログラムの効果に関する検討 —教員養成課程の大学生を対象として—」『茨城キリスト教大学紀要』第 49 号，261-274 頁。
4. 岩田ゆき乃（1997）「水泳授業の展開 —生涯スポーツを目指して 苦手意識をなくし，楽しさを生む興味づけ—」『女子体育』第 39 巻 9 号，37-40 頁。
5. 岩田 靖（2012）『体育の教材を創る—運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて—』大修館書店。
6. 上原利視（1985）「都市児童の泳力と授業づくりの改善」『体育の科学』第 35 巻 8 号，626-631 頁。
7. 植屋清見，孫 大鵬（2006）『指導力不足教師』を生み出したくないと願う大学教育の指導のあり方—本学初等体育科教育（陸上競技）の授業実践を例として—『教育実践学研究 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』11 巻，12-25 頁。
8. 上田 毅，黒川隆志，石川博子（1991）「小学生の水泳授業における運動強度の指標としての主観的運動強度の有効性」『広島大学教育学部紀要』第 2 部 40 巻，163-168 頁。
9. 大山康彦，鋤柄純忠，細越淳二（2002）「水泳集中授業における学生の泳力と授業評価に関する一考察」『茨城キリスト教大学紀要』第 35 号，87-98 頁。
10. 金沢翔一，吉永武史（2014）「小学校中学年における面かぶりクロール習得のための学習指導に関する研究」『体育科教育研究』13 巻 1 号，33-46 頁。
11. 川上光宣，中瀬古哲，永橋 京（2018）「学校体育における水泳指導に関する基礎的研究」『ジュニアスポーツ教育学科紀要』6 巻，9-23 頁。
12. 北真佐美，岡沢祥訓，森田美穂子（1995）「体育授業における生徒の身体的有能感と授業評価との関係」『奈良教育大学教育研究所紀要』31 巻，15-23 頁。
13. 木原成一郎編著（2010）『教師として育つ —体育授業の実践的指導力を育むには—』明和出版。
14. 木山慶子（2016）「教員養成における模擬授業の学習成

- 果の検討 ―学生による授業分析を用いた省察から―』『群馬大学教育学部紀要』51巻, 83-93頁。
15. 黒川隆志, 雀 泰義 (1991) 「児童のプールでの自由遊び、水泳練習及びテストにおける運動強度の比較」『広島大学教育学部紀要第2部』39巻, 149-157頁。
 16. 小林 篤 (1978) 『体育の授業研究』大修館書店。
 17. 佐藤 若 (2017) 「『思考力・判断力・表現力』を高めるための授業づくり ―高等学校水泳の事例―」『体育科教育学研究』33(1), 57-63頁。
 18. 鈴木慶子 (2017) 「大学における器械運動の事例研究 ―シンクロマットの実践と考察―」『駿河台大学教職論集』第2号, 59-67頁。
 19. 田井健太郎, 河合史菜, 元嶋菜美香, 久保田もか, 高橋浩二, 宮良俊行 (2018a) 「教員養成課程における保健体育模擬授業に関する研究 ―授業場面と形成的授業評価に着目して―」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』1巻, 29-38頁。
 20. 田井健太郎, 河合史菜, 元嶋菜美香, 久保田もか, 高橋浩二, 宮良俊行 (2018b) 「複数大学による授業研究会についての一事例 ―長崎国際大学・長崎大学保健体育授業研究会をもとに―」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』1巻, 123-130頁。
 21. 田井健太郎, 元嶋菜美香, 高橋浩二, 宮良俊行 (2019) 「教員養成課程における水泳模擬授業の一考察 ―授業場面、形成的授業評価、観察者授業評価を用いた授業事例をもとに―」『長崎国際大学教育基盤センター紀要』2巻, 91-100頁。
 22. 竹内隆司, 菅沼太郎, 赤羽根直樹 (2017) 「『シンクロ水泳』授業における泳力向上の促進効果について」『帝京科学大学教職指導研究: 帝京科学大学教職センター紀要』第2巻第2号, 1-10頁。
 23. 高田典衛 (1979) 『実践による体育の授業研究』大修館書店。
 24. 高橋健夫 (1991) 「体育授業における教師行動に関する研究 ―教師行動の構造と児童の授業評価との関係―」『体育学研究』36巻, 193-208頁。
 25. 高橋健夫編著 (1994a) 『体育の授業を創る』大修館書店。
 26. 高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎 (1994b) 「体育授業の『形成的授業評価法』作成の試み ―子どもの授業評価の構造に着目して―」『体育学研究』39巻1号, 29-37頁。
 27. 高橋健夫, 長谷川悦示, 日野克博, 浦井孝夫 (1996) 「体育授業観察チェックリスト作成の試み: 観察者の評価観点の構造を手がかりに」『体育学研究』41巻3号, 181-191頁。
 28. 高橋健夫 (1999) 「体育嫌いが生み出されるメカニズム: 技能下位児の学習行動に着目して」『体育科教育』47(13), 16-19頁。
 29. 高橋健夫 (2003) 『体育授業を観察評価観察する授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』明和出版。
 30. 高橋健夫, 友添秀則, 岩田 靖, 岡出美則 (2010) 『体育科教育学入門』大修館書店。
 31. 中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～(答申)。
 32. 寺本圭輔, 家崎仁成, 古田理郁, 平野雅巳, 村松安梨奈, 三浦 唯, 瀧本 歩 (2017) 「小学校水泳授業の現状と児童および教員の意識に関する検討」『教材開発学論集』第5号, 83-90頁。
 33. 土居陽治郎, 下永田修二 (2009) 「学校プール建設の歴史と学校体育における水泳教育の変遷」『国際武道大学研究紀要』第25号, 31-41頁。
 34. 徳永隆治 (2009) 「模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究」『安田女子大学紀要』37巻, 197-207頁。
 35. 永木耕介, 寺岡敏郎, 千駄忠至, 山本忠志, 森田啓之, 高田俊也 (1998) 「体育」二求められる「教師の実技力」について ～子どもの水泳指導実践にもとづいた身体論的アプローチから～」『実技教育研究』12巻, 57-63頁。
 36. 西田理絵, 篠原秀典 (2018) 「アクティブラーニングを導入した水泳実技授業の課題」『宮城学院女子大学発達科学研究』18巻, 1-12頁。
 37. 野村東子, 春日晃章, 熊谷佳代, 宇野嘉朗, 小椋優作 (2014) 「小学校教員の泳力別にみた水泳指導に対する困難度」『岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学)』第38巻, 127-131頁。
 38. 波多野義郎, 中村靖男 (1981) 「運動嫌いの生成機序」に関する事例的研究。『体育科教育』26(3), 177-187頁。
 39. 花井篤子, 小林猛夫, 中村 恵, 高屋敷享子 (2016) 「北翔大学水泳授業におけるスポーツ専攻学生の水泳能力と指導法」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』第7号, 73-78頁。
 40. 花井篤子, 高屋敷享子, 中村 恵, 畠山綾子 (2017) 「水泳授業におけるスポーツ専攻学生の水泳経験と泳力に対する意識」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』第8号, 93-97頁。

41. 深見英一郎, 水島宏一, 友添秀則, 吉永武史 (2015) 「運動が苦手な生徒の運動技能を向上させるための指導の在り方 ―中学校・器械運動の授業を対象に」『スポーツ科学研究』12巻, 56-73頁.
42. 福ヶ迫喜彦, 坂田利弘 (2007) 「授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法的検討」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』32巻, 32-42頁.
43. 本間俊行 (2017) 「大学生の水泳授業における指導内容とその成果」『教職課程センター紀要』第2号, 307-315頁.
44. 松本格之祐 (2004) 「小学校の体育 関わりの深まりを意図した個人種目の集団化の試み ―集団水泳の授業作りを通して―」『女子体育』46(2), 16-21頁.
45. 宮尾夏姫, 三木ひろみ, 柴田俊和 (2014) 「体育科模擬授業における学習成果 ―授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す授業体験の事例的検討」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』12巻 93-104頁.
46. 三輪千子, 本間美和子 (2010) 「小学校低学年に身につけておくべき水中での基本動作の達成度と陸上での運動遊びとの関係」『体育科教育学研究』第26巻1号, 1-13頁.
47. 文部科学省 (2014) 『学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引き (三訂版)』株式会社アイフィス.
48. 文部科学省 (2016) 「次世代の学校・地域」創生プラン.
49. 文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領 (平成29年3月告示) 解説 体育編』東洋館出版社.
50. 文部科学省 (2018b) 『中学校学習指導要領 (平成29年3月告示) 解説 保健体育編』東山書房.
51. 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領 (平成30年3月告示) 解説 保健体育編・体育編』東山書房.
52. 山口孝治 (2013) 「体育授業における児童間の言語的相互作用に関する研究 ―児童の技能レベルの相違に着目して―」『佛教大学教育学部論集』第24号, 53-68頁.
53. 山下昌江 (2010) 「小学校の体育 小学校五年生の『リズム水泳』」『女子体育』第52巻9号, 38-43頁.
54. 山田悟史 (2018) 「高等教育における教員養成のための反転授業を利用した水泳の授業」『スポーツと人間: 静岡産業大学論集』2(2), 49-59頁.
55. Rikard, G. L. (1991) 'The short-term relationship of teacher feedback and student practice' "Journal of Teaching in Physical Education" 10, pp.275-285.

